



高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
”黄金の郷“いわて平泉を支える、魅力溢れる”こしえるびと“のメッセージをシリーズで紹介していく。

地域農業と神楽を共に守りたい

一関市真柴
阿部 繁行 さん

若い世代の道しるべ

黄金に色づいた稲が広がる水田地帯。地域農業と神楽の行く末を見つめる阿部繁行さんの姿がある。繁行さんは2011年、定年まで1年を残して退職し、就農した。地域の同志と農事組合法人テイラースキム一関を設立し、「地元の給食センターに地元野菜を提供したい」と野菜づくりなどに取り組んでいる。

農業の傍ら、繁行さんは牧澤神楽の三代目庭元としても活動する。地域での農業従事者の高齢化後継者不足が進む中、神楽のメンバーを農業法人に迎えることで「地域農業と神楽を共に守ってい





地域の子どもたちに親子で神楽指導

くことはできないか」と模索する。そのために「まずは自分が若い人の道しるべにならなければ」。農業と神楽、両方の盛り上げを狙う。

牧澤神楽の復活

牧澤神楽の継承に力を入れる繁行さんだが、幼少期は練習で聞く神楽のセリフが怖かったことから神楽が苦手だった。以来長い間、神楽を遠ざけてきた。しかし、中学校で鶏舞を習った長男の吉田聖樹さんが、社会人に

なつてから当時の仲間を集めて「牧澤神楽を復活させたい」と訴えてきた。息子の言葉に「庭元である自分が何とかしなければ」と奮い立ち、やっと見つけた1本のビデオを頼りに、息子たちはテープが擦り減るまで見て、動きを覚えようと練習を繰り返した。一関神楽の指導もあり、2002年に牧澤神楽は復活。「自分たちが牧澤神楽を守っていく」と、信念をもって取り組む息子らの姿に頼もしさを感じながら、繁行さんは若いメンバーが活動しやすいように全力で支えていこうと思っている。

広がる構想

牧澤神楽は16年、市の無形民俗文化財に指定された。地域で認知され、

各種イベントへの出演依頼も増加。今年はブータンに派遣され、ブータンの皇室関係者や秋篠宮眞子さまの前で神楽を披露する機会にも恵まれた。現在は地元の子どもたちを中心に指導も行い、神楽に触れる機会をつくっている。

神楽を受け継いでいくためには、常に行動できる人材の確保が欠かせない。繁行さんは神楽のメンバーの就農に期待する。そうすれば「地域の田畑と伝承芸能である神楽を、どちらも守っていけるのではないか」。若者が魅力を感じる地域農業の基盤づくりを目指し、一つ一つ課題を乗り越えていく。――代々受け継がれてきた牧澤神楽を一日でも長く伝えたい。繁行さんの挑戦は続く。

PROFILE

阿部 繁行さん (66)

Shigeyuki Abe

一関市真柴

1951年一関市真柴生まれ。岩手県立一関第二高等学校を卒業後、NTTに就職。2011年退職し、就農。仲間と共に農事組合法人テイラースキム一関を設立し理事を務める。個人で水稲80畝、法人で水稲10畝、野菜30畝、果樹1畝を栽培。妻、次男夫婦、孫3人の7人暮らし。



私の相棒

薪ストーブ

東日本大震災で停電に見舞われたとき、家族を温めてくれた薪ストーブ。ピザを焼くなど調理にも使え、大活躍中。